古今和歌集正義

秋上

七

香川景樹大人著述

古今和歌集正義

秋 上下
冬

東塢塾藏

古今和歌集正義巻第四
秋歌上

秋立日よめる

秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行朝臣

ろくおよいへる真清水よりさらさらと
涼しおこまるなと有のまゝに述きらんよう新く初秋早涼乃
けしきなるこのふうへるを其也
まれ詞自然来るる風の寄よこうへるなををくくわやの外
に誘へる手古奇乃すゝるこゝろ及び鞍きけるこれ也共をよく
す幸なるまゝ

秋立日うへるをのことをかをのうへふうへそうへまる
ままのやてようふ
うへるをそくもあるう折ふる涼としをや秋いるうへん
敬上人乃納涼をゝ諸共よまりやて也逍遥の詩ふ寿ら荘子

ゝ逍遥遊より云なゝをやとくおまうせくゝ遊みわきを逍
遥をとめるうのゝゝ一ゝ其詞也無補集まを結共ゝ逍遥をゝ
和名とあやて俗ゝ遊山ゝ云ふ似ゝ重之集ゝ舟遊遥ゝ云
るゝ今舟遊山をつふひゝ西の國まくい今を茶遊遥なゝ云
やゝ古ゝ妨ゝ限ゝは世人の詩やもうへんを旨ゝくもてまる
俗語ゝいへるもかゝる公さまゝ其文まを悟ゝゝ書れゝる也後世奇
を好む類ひゝ思ふ處ゝすゝ歌のこゝろゝ叫ゝる川風の涼しまま
ほまゝくゝ折ふをゝをれい此涼ゝをゝ今日の秋い立くゝんや
いへゝ涼しきも涼のよふへるを一川風乃吹ゝなれい秋の幸つ
を涼のくゝみもまをや云ふるゝれをもむきを也

題しらず

よみ人しらず

秋ぎりの立ちもかくしもあらなくに
余材小御ろろろろろと同ゆる奇也といふ小御ろ秋
ろろろ朝をろと住ろん男女さる庭ろろをろれるをろや
ろろくよろろ一やうに事なろ一ろ秋ろろ一ろろ
おろてなろふ對ろ称ろそおろろろ方よりやろろくろろを
ろろてもいかろろ細一ろろ安の國ろ大古ろ云れろろと
又俗ろ仙姥一ろ仙面白きなろ云ろよく叶ひくさるいかん
ろ姥一く面白ろよろく表ろおろろろ斗ろ私ろ指き方ろ
似ろろろいろろも又自然ろ實の云を含ろ却ろく深く姥一く

序より面白き方ろも有れる也ろろ若一ろろ寐一ろろ悪一な
ろ思ふ色し今ろもいろ久つろろろと云ふろ中ろ強ろ方ろおくれ
ろ其ろろ衣ろろんろ神ろろんれろろろろんん
ろ便ろろれ小裾ろいろれろ秋風ろ吹れろ人のさまろり
浪家此上の句を序ろ見ろるいふ一ふやうて
未ろる初風ろ一わろ也一ろろ悪庭せる序の躰おろんやろ
はろろろろろろろ古歌ろなまくろろれろろ序歌
ろいふ一ろろす序のろろろ

○遠鏡小寸林良材集ろ引ろろいろろろろろろろ

すゝき秋の野そよぎわれもこれいわきをこゝろなく本も
有しなるへしと云るハ非也新古今ころほひの初花の奇を玉ふ
とう命ぜさく家背子を我妹子とよめるうへの趣のおう
しなのこゝすもゝハ調を以こゝろもる也恨んと云
より調へたるまんまを家をこゝのとけ更れす衣の裾をぬふ子
と受たゝ家妹子うとハ変うまを起へはくハ思ひ出ゝ調
ゐくく立ますゝきを折そへたる也
此のみこゝろはるへとやもへハのまゝ秋のものふく
云ゐるこゝ
○餘材まさるへハきなへと云ゐるを以畧せる也早蕨早

百合おもへ公也と云るハ非也さハ所はなれはるく五月ころ
物まだやうへゐるの中小殊更ゝ挿苗の事ゝ多ハいとさる
つまぐらを始めゝ何とうの事今を田家ゝ廿こゝろくハ
もゝ挿苗より五ゝ結のさゝ物も及ゐるゝ秋五月而
五月蝿五月百合なゝ尚ゝ近頃思考も結まゝ熟業の後
申てん是をゝきの畧也と云るハ不逸の説也さハいわさ而ゝき
穂なゝ稲穀ゝうへのこゝろハく外ゝきこうほよう若おさと
をんこゝも早蕨かとハさゝも云てんやうくさゆゝをいわき
公とせんこゝとゐう又云さるへをこゝろとゝふハ田を挿んて
苗代ゝる紙取をゐ也と云るも非也苗を取ハ挿る事ゝく

祈年祭乃祝詞ニ取作ル事奥津汐年ヲト云ル取作ルト云ル取ルト
即同ジクシテ凡ソ物ヲ取ルニハ手ヲ以テスルナレバ手ヲ廣クイフ初ノ
幣ヲ取ルトイヘルモ向ル事ヲトルト云ヘル意ニ彼ク事杭ヲ取
トイヘル痛ル事モ常ニ床ヲ取ル數事湯ヲ取ル汲事
腰ヲ取ル按ル事ナドヲ推ク知ベシ

秋風の吹ます日より久しくなりぬるかと歩ゆく見ぬ日なし

大伴家持ノ秋風乃吹西日従天漢瀬尓出立待登告許曽ト云ヘル
ヨリ秋ノ風ニヒヨリアヘノカハセニイテタチテマツトツゲコソ
ハ彼ク秋風乃吹ヲ以テ天川ハ西ヨリ東ヘ流ルヽヲ知テ
ヨリ出ル迄天安河ヲ渡ルヲ待ト云ヘル意ニテ安河ハ高天原ニアル川ト

のさゝ舟のうく出るかまでもくうち舟也顕注に新院乃
御本には松影波揺うと書れたるに揺を直してく舟とかく
たゞ但考賀方集云天川かうち浮あるさまにいへる揺ハ
らうやらうすや此言葉以古今為本詠歟然者賀方乃説
本い揺とあてもそうや近来人ハ多紅葉の揺と詠也とあて
て即歌服ハ院の御本ハ舟の方に従れたり密勘てハ舟揺ハ
両説也舟とも揺とも風情よろこんで時兵ニ可詠用也とまれ
こゝは例の古揺をとりてく落葉を知さる乃説にく論一般
既に六帖にも揺このてく揺もこん事論なく舟と直され
さるハ紅葉を揺に用んにさなき事と思つるよう紅葉ハ

水に浮ひてうち舟とこん事をよりなれハ海人の流する
舟のやうにうかべるかと注へ来る例と従もそのまゝ
流もて枝のうち井渡す紅葉ハ水なき処向を知さるより
或ハ也空揺物語に秋深くなりぬれハ何をそとて
このひのうちんなとこゝるこそ乃賀方ハ奇も是よりく
よめる也説をも
○打聞小顕昭本ニハ水うち舟とこんをたゞうる紅舟とこ
揺とこんをたゞうる紅舟とこゝなほされ本とハ思つゝ
揺とても吾もおふあゝ舟とあてんハやそうこゝ吟
ゆされとあゝく改ちくしゝ非也こゝちそのゝの

天川と紅葉を橋とかけ渡さんとふ設けみたるを余も
たとれなく妙なりかくもふ舟こうかと思ひ注つるも大
やう待を去の思ふとり舟の異説をおもれるもおもしろ
紅葉を舟となりく川を渡るすといふくさん
やい不成の語也
こしくくわとまおもれあるもいとも初二の句よし色尋常ならず
真趣い例の有れりといふ
を玩味をへ
寛平御時なりけるとき
作られる時人ども
はて残る　ともあり

てこのあさせしく浪をとめくわくそ私いにきそしよけふ
第菜と天漢去歳渡伐遷用者河瀬於端夜深去来
しき趣也きるかたくおもて尋ねるまもなさくもなく
く残白浪まいれの今真白浪やうふ
ふ水の等しきえゆるふこうすさ古い共秀句共者ふ川ふ残る
語をたく事をなりやき踈うなふ
果めるふ云ふきしき古言也備のめるそい今をふ弱
也と関人いふ
○打向ふたになめ共旨やうふ
来とおもしなふん取ふさ

ひとつふたつの川一向一くうつる初もと二ゐの水也一川二ゐの流かと二ゐまをおよぐなどやうの事ありなどやうの事ありなどやうの事あり

なねそれ君あうまでと　源氏君のきの朝臣

今ならでわうく少弐いてそ

やうのの日ようふる

なくあやかいてそこんとしれきの

芳葉小織女之今夜相奈婆如常明日平阻而年者将長と云ふ

似るわさく七夕を巧奠いうきさせる事の却く真めめれいまや

なくを奈良比頃より盛んなるそはやされて舎合のさまを

人間のよなうけく言の向ある法ひ物るまくよう知て

真玉一方なくもとも真実よりいよ紀奇也と云を更

て感わるふなり又志ま〳〵古より今まであるく殊

て奇異なる奇れなるを〳〵

まて却て花鳥のよいうを殊小此集の奇なるも皆万葉中比糟物

に書所偽の生れもへうくさるをやよの

題しらす

よみ人しらず

未開よをそりくる月のうきをこれいくろ〳〵の杜る来まけを

此奇心ばえの也と〳〵毎又折ふし解得うふよくちをる〳〵

真すまるこゝ深幽微を究やく感哀あまやふ深くれ辺ふ法ふ

うふ吟玩を〳〵事完ハ月を秋こうと待つる小真月やうて秋

を傷ましむる蔦矢也（サキカケ）

なりとあやまるき未開の新き大方ならふ

ふをうくちよをくふ〳〵

○遠境ノ寐テシマウテムサクト明ス人モアラウカキコエヌコチヤト思ハレル
と云ハ雁也徒ニ寐ムクトいひし徒ニ寐ムクハ雁の
の中ヘ我ぬ人をくゝふ廣くゝいやゝくゝるなんやさゝ取ある
詮朝を待知ハいれるよや我旬の人ゝうをキコエヌ
コチヤト思ハレルなどあゝぬ事ゝきゝへ我ぬやすてるを云也

題しらず

よゝ人しらず

しらにそめうらかゝるとふのうきゝへ又ゝふおよの月
此おゝぞハ白天をさゝ太虚をゝ云なゝ事サなゝうゝ
万葉ゝ安麻久母爾可里曽奈久流（アマクモニカリソナクナル）天雲翔雁相鴨雲隠雁鳴時か
やいつゝ皆高くゝ見えからゝまをゝ我よゝをうゝれなやそゝう

此の事也青雲ハそゝとりて天雲白雲なゝ多く空をさゝてゝ
めやゝ又白雲之棚曳國之青雲之向伏國乃天雲下有人者云ゝ旬と連称
くゝも云ゝふ只大よそなるを見ゝへゝ常方ゝ白雲ゝ飛るさゝ
うゝうゝと我をなくゝふとゝくゝ今と同ゝ只大空を打群ゝく飛ゆさ
ま也羽ずゝハ遠境ゝ雁と雁と羽をゝ合ゝへゝうゝして飛ゆゝふ
を云ゝ白雲と打ゝうすふゝ也ゝ雁ゝ四向ゝ常方ゝ数本ゝ
ゝ新さゝへゝとゝるうゝ正ゝうゝへゝき数とゝをゝいそれさゝるふゝあゝ我と新のう
さゝおゝやゝ雁ゝ其新ゝ人新なゝの新ゝく飛ゆ旬也實ゝ八月秋
ふ鳥のとゝふゝふと又越ゝへゝおなゝ我とゝ月のゝうゝてゝあゝのゝお我ゝうゝん
てゝおゝくゝ面ゝをはゝうゝとゝをいゝる也歌ゝ泊ゝを幷ゝるゝうゝふとゝ雁

ん新の庭まも掃ひそくろんい月のよいめくわうきん也と地てる
移ろふ新そろんれきる云よそこ寺容動く秋の散れすめる空そ鳥
舎の啼わそろん面新ゐやうやぬ仮き新の移そ住の月まかなろん
往を遠くそこをそく隈ゐまよーをそく詠めん庭の面宿さん
社のよそを新そゆも中かーてん白そそ羽弁ー飛ん新空弁
小雨そそふい月の新ゐのきかまなろんーよろうんそそ羽
弁ゐいさん鳥をきてふ照さん月いなろん人の仏こそまく教新そん事
ろくそや仮き云く白雲そ飛くく新そえん事覚来なれい教そ宮ん
ゆろそ住き仮る也とあや妙文中なろん人の仏こそまく新そん事
新くや仮ーまの一向差隔をてゆそろ新く仮れい失其宮をそ羽仮

秋上 十四

死ん人の仏れ仏い次なるまーそれ童ゆそろまく術字なろーく新
乃今その新い数ゐ誤ゐん事論なく新くや仮き新くや仮ーまの
き也なろん人のこそまく数乃ん事教くや仮き地上の新そろ
ひてろやまそ仮いそれきる也さく其宮ーる大きい教さーゆる秋のよ
の月とゐるきふ鳥れ事やそーん変まる其数ゐそゆまなーねと面
新ゐやうやぬ仮ーまの又ろ新さーの祝そ住ーまく詳をい月小翔ろんやとい
よ遠くとあーと貴く隈ゐき隈やをそくーんまれ庭の面社れよまも
新乃ゐそを教ーふそゆ新ーてむさしそきい月下をゆ鳥也其月下
社白雲小羽弁ーふき其白雲やそて月の隈と知まるい新れあるきん遠
ひて急ち地上の新もろーきなーすゆ月のまよろれそなるそる羽弁ーい

ちとなのとはみをめぐ雁こまれ岸ゆるるるに月わるるえゆ

今宵も更くるるや秋なるる雁こ後のまもなく咲ゆる木庭

ま月もめぐりてこゝろと云ひ此句八等窓より前皇子を或人のまれる

三首共中まもく次ぐる句妹當茂苅音々霧来鳴而過去及ぶこれも

同じ句の移りもく鳴る秋ぜる也句のよきる多

ゆふぐれやすぐ雁ぜ秋なるる秋の衣もも面白き句

小月のやかるもなるをまぶるへ一ぐる雁氏ばゆる大空を月の更

ゆる迄月ぐもを小雁の雲ぜ秋ぜ合ぜる稜　大江千里

これらのごとの歌氏句月のれいちく年物ごろかなし

句の云ひ廻しぐ

○古今集小雁歌所にこの秋まあるぬをいとくかくまで悪

しおやとやまされるゆるる也とこゝろ雁也こゝ我所一生の秋まあ

らねど家ぜもこつのこゝろ物こゝろ悪ぐれど折のへ

しく落ちる句也いとかくまで悪ぐやとふぐむる雁ぜす

況や夜いやこゝろるきをあんや秋まあるのぐ移ろいとくく

まくらは袖脈をはくかさる事也よく吟味をへ歌ぜもこの

の秋まあるぬをこの歌辞をくいとおさ八

ぐくれ出ん事をとよわ也されいとそあぐ移ぜ紙のぬをと

書こくいうそかくいこの方小紙なをあねこもあ

ぬをとふそんもさうてあるものくらいとうとまれる名所景と云へり

そでぬれ

久うの月はつるを秋ながらなをみちもれやてやまさるらん

友をよめる

立原元方

秋のまた月のこうをしめうをれいくらふの山もこゝろ有ものから

人のもとふまれやをる雨よおもくものゆくをきてとゞめる

藤原兼輔

おもくもつるゝ雨う秋ぬ歌のなうた思いれてまきれふ

人の許いなどもとめ何う手使てをくるこんをそうもあるうまち

なると折うて思いをくさめてよめんやうをおもひをかなり

くもそよかこちくく云る也

○洛注人の許を朋友のもとへいるくうなるへ久んや又此寺支のやとりへくく何の感衰あらんこそ

秋ぬまた寺いある〳〵すとも思へる例の際也月一養も後くおひ

よを半ちんの或ハ序枕なるへしいと必要部ぬ入む事論可

實事實景なんい其物さもの小説にくゝるへっとる散立やる事る

また〳〵

是角ぬ又この歌乃歌合ぬくゝ

秋のよもあくるをしらすなく虫いまのことものやかのこゝろうん

こゆきぬ朝臣

こはゆるる月をの庭なるる朝をの庭なるる虫のをを歌て

物もいはるゝなりけりとよみかけ申せる也

題しらず

読人しらず

秋霧をいろにもみぬれいきをもくおもひのよるの露とこそふさゝめ

詞句の俤まい俤る也古也さるい初句まもて志ゝ人をなさゝれいるをまことなるさゝめをるのゝ

○古開ふさゝれてるふる民誤白る一わゝれいまくいことわ

下ゝ空えすと云るい那也菅万ま當補まくつの五月金ぬら舞くる年ことふゝあくゝ角れいと月九雪ふゝ也ゝ志ゝ本ゝ

老とうすゝらゝ白くら拾れいなとあゝ近くい西行の庵さゝる

月也雪ゝら女郎花まゝあれぬる志とゝ角れいゝとゝよ久ゝるゝ

ら風例まてゝあくゝ久ゆるい白くゝ久ゆるい花と久ゆるいと云〳〵まゝ紙ゝ

れいと強いて奇と親〳〵ゝ女ゝる是てふゝをは帯なゝ此類ゝ

誉ふまゝんや

○遠境ふアノヤウニ虫カ難義カツテ鳴ノヲキケハと云るハ那ゝり

これを俤也ハまてハ本末のてゝをゝ并合すゝ志〳〵るまゝ角く

仏をいふゝくおけのゝれいのゝを強くわくゝ也る也俤しゝ紙

おけいとゝ紙〳〵きなゝんやい難義カツテ鳴ハとふゝくゝ也

君しのゝまゝやはるゝふゝさゝまゝれぬる那ゝ志ゝ

些君しのゝまゝやはるゝふゝさゝまゝれぬる那ゝ志ゝ

ま也
○右閑小序ま松虫ま
ま
ま

と書なせるのミにハ消息をとゝみやこにと云るかと猶同し云
ゝ為也

○遠鏡ハソチヤオレヲマツノカト云テトレヤ行テオ三マヒ申サウヤ
云ハ非也マツノカト云テ行テオ三マヒ申といふ詞つゐに世まある為
きなんやとハいさ行こゝろもしらと云まて何事をか
なき句調句をを消息する事をもとゝみやひと云るを此語乃
四方也と云得く行テオ三マヒ申なと節を両事に組こゝ
をゝ也

もみちをゝりてくたされる歌前小されをまゐ出こゝら鳴ん
按ふに松虫ハ秋の初めまく盛ふるゆゑ今こゝらなくと

むと云る頻ゝ鳴こゝをきなるふ如き散つゝをまこゝと事
皆秋よりハ初冬ゝさまなるもあゐゆゑを見えす又松虫ハ蟲ふと
の数句して專ら山野或ハ放郷なと人氣遠き前小鳴ゐる故家前
小と斬まうせるくふ句をふさゝこゝと云ふ撰六帖等の此本
の句秋代野ゝ集やとる人をまもりふ又をとゝみやうふ此歌ふ
来ゝやとゝん人ハ有てとも松を沽ふあふ護を待んといふ意
ぬさゝゝく旅衣の積らん宿ふ護を待ふをとふ句ふまくこゝ
くさゝゝゝ護ゝふふてとゝん今ハ二様ゝ云傳ゝをゝ
調ゝはまく如衣の方をとゝれるゝ又ハ投ゝ書をとゝるゝ甚
おわつゝなり

○打聞小秋乃雲ゝ奇ふあるぬこゝろ歟の散て狭もる心
いふハ松虫ゝ奇まく未なるもこゝろ入くる也と云や遠続と是
をよ後ゝともく従つゝ共よ非也松虫の末ならハ所暮秋をん
事論なるを雲秋乃奇ふ非をとつるいふ又をみち歟ゝ
散て狭もるこう雲林まあゝ従ゝて遺京をゝもれたるをの也
ひくらゝ共まつるなゝるハ雲ぬとねをみを山乃こゝけもう五をる
○四頭本六帖朗詠等皆とゝみえゝをうるそふゝるまこゝけ
山陰の暗おを云るなるハもゝふとゝみえゝとうふうまくゝ
くゝ行ゝえゝと過去まいゝるゝ共山陰を離まゝ事ゝちゝる

きる也ねをゝふハた共山陰をうこゝろ云ふを安ゆる方あをく正ゝこの
ら従容動小家の本ハはゝおを云ふゝ山乃とゝ書付るとゝの也さしい
今の思ふハた此容動のもゝてそ乃又鶏ゝたる也さ歟い定家ゝの家本
ゝれをもゝハとゝあをく流布の本ハをえゝとゝみゝ事を論ゝ又と
みえゝハ社と文字を或ハ上小或ハ上ゝ属をる共説まちくまい事も
ゝとゝは下向小行くゝまる也下ゝ行ゝ奇多く容
動まとゝまゝハと書付るとゝの也ゝ即当時をゝ小法をて云ゝ
ゝ説也をゝ上向ゝ属をるなゝらハ此ねを（ゝとゝ書るとゝゝ
きゝ也

○打聞遠続等なゝるの（を濁をるハ非也こゝ共歟中なゝの

への仮字小倍の字を書るを
和ある也余も古る也倍小多分清る仮字もてつゐ苗小更よ
濁らぬきなくす今をはゞ
引る六帖の哥小雄眉井乃山田小まの一種君ましなくて生
こゝろくまとあやまりてにをゝのなくを
なせる小を濁るき我知ず
ゐくゝおなくみきのゆゑれ風まわりふとみひとも
もろをよめる
ま引人をあくぬをおゝくもろうをものきさゝゆゑくゆれ
まつもとう書信をこんいめつゝまるこをれゐれ共行今ふ

あくぬをのゝくと云かをいら
来の人めきたまい第第く登保津比苓加里我来鳴与遠津人
猟道之池余なる枕まき（トホツヒトカリカキナカムヨホリヒト）
苓山郭公いつゝ来なくんなと鶯郭云なゝのやかねくようを
行らく情きをのい又さゝ
○打聞小雁小書を第くゝ来（おこ）をゝ事よりもこゝふを鳫
を遠津人の使と云やとい（ゐる）ゝ雁也こい行く遠方人ま似
こゝろよやおもいよせこゝろて鳫書の故事ゝ非すされい
書とそいくも人と云やゝ又行人まあくぬをのゝこゝをまつ人
の便をまつれ小はあくぬと雁小なくんやいはる

むそ小視たるそのこゝろなるへし詩豚を差つるあれ也

○遠鏡小コチカ待テ居ル人テハナイチヤケレトと云ふ詩非也鳧

八遠方よる来まい待人らしきものうち狩さる人なるねと

あてそうれしくそ（也無てもの待をる人あや其待ける人なり

うく秋とくいふやうに古重き詩調なるへんや皆知て

是負ぬさまの歌共奇合のそく

とものり

秋のせ小神うつかねそおもふらんゆふ露ことに玉ゝさ枕

おけ藤武う故事よる後るまく詩注ま妻秋風よまをるあ

秋うせのこちよまた（もそ）て峰まるを共なまい苦薬ま秋（アキ）

風寒暮丹雁喧渡秋風之吹来笛丹雁鳴渡なと云なくて秋風（アキカセ）
（カセノサムキユフヘニ　カリナキワタルアキカセノフキクルナヘニカリナキワタル）

小山飛越雁鳴之なのと并住をくさ（言もの今もの風ま并後く
（ニヤマトヒコユルカリカネノ）

鳴ら言也秋風う琴を以ねるらす即苦方ま此言

秋風小峰うかまうとのや玉梓い使とうそん枕羽まて言葉

まあまる尺くて誘迫さ事ふく云ねと定説なり與沖云梓ハ弓を

いふ云まく方桑小刺揚根張梓矣卿キ二所取賜而云ことのる
（サスヤキネハルアツサヲオホミテニトラレタマヒテ）

梓まく玉をいをなるへしと云ま是ま困く考るよ

弓ま仕東あまい甚弓東ま云うをく梓弓きうねと受ふる云

の枕なるへし梓弓本と受未と更ふ小用ゝ玉梓弦妹者珠（タマヅサノイモハタカモ）
とあるを弓を射るやうかゝまる也然つうなまて後只玉梓と

そうと云てを使の事と某久人を其使ハ多ク書そて仕の事をも其なんまいやうく又書の事とも称しそる也其他の好文字をさ〻玉章と改めさ〻むまたはいよく書の事と称実れや其の玉梓ハ狂使の事さく准ふ為の初めおを〻ハ此奇の玉梓ハ狂使の事さく准ふ為の使をつをく来ハんと云やとすうけくハ第参可里辛都可比余衣豆之可女雁使者宿過奈利九月之其始雁乃使尓毛なとつゐるさ〻又六帖ふハ川こと雁あまとそせる玉川さそうた田邊の磯をハ狂使の事ゐとなるを雁の折釈さるふ心ひよせそる也と思ひとやさ〻

稲負鳥ハ稲令負ノ名ヲ負ヒ渡リ来ル頃稲刈リ
田稼ノ事終ルヲ知ルガ如クニシテ清浦頭昭後成定家
ナドノ先哲モ已ニ惑ヒ玉フナレバ更ニ定ムル
ニ能ハズ我ヤドノ辺ニ来ル人モ稲負鳥トアレバ
ヤガテ頓集ニ筆ヲ染メ給ヒ初メテ稲負鳥ヲ
ヤガテ受領小鷹狩ノ奇也ト云ヒ合セル鳥トナリ

又和泉式部家集ニ逢ヒ見テ稲負鳥ハ何ヲ一ツヲ
モ思ヒヤハ播州百首ニ公實卿教長ノ撰ニハ雉ヲ
鳥ニスルモ其ニ首ハ鶺鴒ヲ云ヒ又萬葉集ニ
クヒテ忘ルヽ山田ハ稲負鳥ノ一ツニヤ又ハ山田
ニ住ル鳥ヲ稲負鳥ト云ヒ山田ノ事ヲ付ケ山田
ノ案山子ノ鳴音ヲ稲負鳥ト云ヒ又次ニ山田ヲ刈秋ノ後ニ多ク稲負
鳥ハ渡ルナドヽアルヲ皆同ジク稲ヲ負ヒ来ル
古今ニ秋ノ田ノ雁ヲモト云ヘルヲ又仲正ノ奇ニ賤ノ女ノ
イヘルニ投ルヽ掉小舟ヲ漕来ル雁ハ稲ヲ
ムサマナレハ稲負鳥ヲ雁ニ非ルヿヲ知ヘシ

上の和泉式部公實卿の両首ハ庭てまを稲負鳥とよまれしを
とりて其名を互ひによまれし風物也とてそんな庭をきハ稲
もむをの小雨すゝ又稲負鳥ハ秋ならでハ又ハ
其趣異也此頃前宰相公燕卿宣ふく今俗ハ河原鶏とよめる鶏
乃一枝ふく秋乃ころ渡り来て田野に群飛して稲をもハむ
をのあをおくらハ是なるへんか一時ふくの来ることまれ
令ハ名義をも叶へ鶴鶴ハ数品あれとハゝ毎皆群飛せず又
稲をもむをのみ非ずと寛仁の頃動を給へる時也又大和物語に
さう更て稲負鳥の鳴声を君の幸ふくともしらるゝ歌ありて
しかを何もなゝくの歌ふくの取合ハ此外異説多

しとの心ふくをふまへたるなり又歌注に公實卿の枝舎氏云を判
して是ハ馬也と云ハ名をよまれしとハ
者なれハと云ハ名ハ
と或ハ枝指九指ありて
ありて振まハさまを過てふもとを宮へるをいふ
おもふ指を人にられしも荷おへる馬を得ずとすれハ
ん事何の報ひん況や馬を鳥とハ云へをんや
いとゝやをぬるやうにして霧の色とる本こをかくなく
鳴を霧霧さむく来るをいふ
如白露と云て色とるとハやうにをきあやて

かゝるをするものなれどうくよう久中し給ふ旅爾師手衣應備妹
毛有勿爾依農能岡將超公爾衣備益矣集中おもふるしのき
ぬを着きうりきるを朝き返もとてみとをるく男女いもともあ
男とうもをするときも也けて夜を寒みい應のあるひき打合でお
うきも也

○余材小此奇ハ或人の云く柳本ハ人丸の也とをを粽して此奇
菅方よりあや寛平后宮の奇合乃歌なるへ萩のおもいうりろんう母
をのとふ鳴ける應の寒みなるへ柳本ハ人丸の也とのふい俗のとうに
云ふ打閑うこと是を古注の柳本ハ人丸の也とをく寛平ハ御時の皇后ハ奇合の奇ともく
此奇ハ新撰萬葉ふ入くるハ

なる事其序うかゝうやと其よ此奇い萬葉ふやきのよう云ことふふ
をせうへくるのこそまうをよくよぬ人の云る注也是誓ふもく
を此集の古注といふをのくうふ撰つまを知へしと云る其ふ非也其
菅家万葉を寛平后宮ハ奇合乃奇のことをうまてうふかうとお
うふい却くこの序文をよくよぬ彼集ハ后宮乃奇合ハ
をとをのもうく其外を今古を撰をを集め如れい其辨一定な
らん其こと春部の巻うていハ花とやうらもの那ふ既ふ春しれた
や打閑すへくの左注を言ハ改めうくまやらんをを考るいもう
此古注さよれや其高此奇萬葉ふあまもい后宮ハ奇合乃奇ふ
まきれなへ然ふい人丸とふ必撰者の筆小非すと思へる也

又此奇小歌をきゝもし衣うつ砧の尤おもしろき秋此奇よりよりくはく衣うつもかよりみくやきる小萬なれく却らくをめづらし油火等歌のきゝはさまの言をみうるかとなとくふふ味妥也又両くたのつる奇を同一ものかゝもいかゝや

寛平御時きさいの宮歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風を聲を洛よりつたへてくる舟いおまれともるうやもるうみる何まそを霧雨もるをうる出るほよあくふ河くなるくふみよりをくく鷹の聲高く事をうるよりくとふ今も舟の帆を揚るふよりをくく鷹の聲高く事をうるよりくとふいなせもを余材も鷹うおくく檣をおもふ此うもよりて鷹檣と

いまされい舟もよりうくく詰よ奇もうみふ也云く空のまくくてひろくとうもふ海よ仰くまもふ万葉な人丸の奇よ天の海ともろ波うちよよ純をふ又天の戸とふ事をあもふ海の迫門よりくく天の戸わるとは云を枝をうふ集中高氏奇よをふ小夜更て天の戸出るふ月影よよあや詰の云一行の鷹を舟うへくまうもふ綾帆をあをくるふおうせ天の門を海つよをくうも旦来さもの秋風やうく迫まう風よ等なをうくなとふみーくおうふい也

○余材小琴を洛よあやをくくとは高く鳴く琴絃あういな出ん仏也現形をふ洛ふあくと云又物よ従く洛ん

出とそ云風前也とのつる小非也秋雪するを名残とおもふ
てとわるおくとのつる事なし今ハさほど出す事成ものを
いひおほせて舟の跡うめそをくるをまちかねをくも
風前也と思つる小誤也

○打向ふ鳫の渡る秋舟とうち如くを学ひ統と文粹ニ庭檜
来とそいふまこと春を檜紙おも音とかく春を帆に揚て
くる舟とう云る也とう色る小非也春を帆の方ともやくる小
又檜の春ニ向ふさん事ろ二のつる小遠境ニ船ノヤウニ見エテ
来ルモノハ鳴テワタル雁チヤワイと云る小初浮ろ事
かやうの事ともをまくよめる

秋上　三十一

うれこころを思ひ沈く松く鳫うなれ秋のよふく
うは鳫乃鳴々ふよをまくとこう色ひを述るまく其うちう
のく一句を除をは小常ニ述懐乃意也法ろみとそ
いふ鳫の縁をこのみまるみを

是貞のみこ家の哥合のうち　平ろ朝

山里も秋ハ我こととなけれ共鳴人ハ何
故人ハ
松く山なれとみち有ことろなくろ秋いうれき

百首異題ろ委ー

題ーろす

秋くさのふるさとをれいの山下とよみ来つるなどなくらん萩の下葉をなどのめくはねをれ山下とよめて鹿乃啼ふるをもて社あれそうく斬なる萩を折鹿をうつる物ゆゑかずあつるを辱しむ方よみ出つるもいと殊勝れたる歌ぞかしきうふきうあるいうつくしふ折出ぬ事ふるい甚ふるらくやあるなどのふるらく真様子をいふ也さるい大やう物おもふ事とうく差そすうつみうるなど風流れをよみ出つるなどがまあたらしき事を怨恨の字なども思ふる萩なれい如くてや鳴んてふ言とすゝうつふれいまでふるやを一向仏ある事よさゝい心とよみ出つるなどの

怨こゝろをあらぬ萩をさらく今やの萩なるらふるを好てやふるとのふいまをものふ又うつふるとわふるとも一向云ものんや委く外ゝ条々

○遠捉ゝ此ヤウニウナヽヲヤケテ居ルノニとよみ出つるい非也ゝ注万葉ゝ左小牡鹿之鳴成音毛裏觸毋来（サヲシカノナクナコヱモウラフレニケリ）の類わんまをもよの牡うらぬまの物語也ゝて項を投る事なんこゝろをゝのきゝ出ますれ結句ゝを仰ふる事ゝ得あやまりやひをふひらつをれ音便ゝく平伏ゝる事ゝきゝ君ゝ来也又居れつゝ居るゝの云也と云るも非也是ゝ云ゝ川わうとゝねハ云ゝ猶ゝく物を思ハ云ゝなゝ絃わゝ

もよおす事を強く言ひあらはし給ふ大やう禽獣の帝を祭る
ものにぞありなる
○余材小志ゝ竹と云ふは河ぬ井抗ぬくれぬ栄竹なゝをよこ
さまのあらく云ゝ鹿の萩の枝をかくらをまくぬ乱
もるゝ枝ゝ竹ゝれいまゝみふもると云也と旧説ゝうく
云ふ非ぬ共ぬ非也まゝみ何ゝてもをやと
うゝむ抱ぬゝ就中ぬせくゝをう世ぬ用ゝるの専
らなる事なをまふ其方ぬ名なのれぬをぬせく
ゝ竹ゝるよゝと鹿のよゝをぬ非ぬ萩ゝ竹ゝまゝみ
ぬいふのまゝうゝみと云浮〳〵等ゝ可良麻流枝義乎波

可禮加由加乎(カレカユカム)なゝと云るかゝをまゝむまをくまゝる
ふれてゝもゝるをゝ世ぬゝふ
なゝをる紙ゝをるゝゝ
○遠境ゝ野ゝ萩ゝ中ヲフミアラシテオシフセテシカラミニシテ鳴テアル
ゝ鹿ゝ云ゝとゝゝる共ぬ非也これを柵ゝてゝとゝるゝ柵ゝ垣ゝ
のをゝとゝ思ゝ乱也ゝる萩ゝまゝむさゝ紙云るゝゝ風情ゝ
あゝれ彼ゝ遇ゝる跡乃まゝみゝゝるをゝ字ゝゝんや

藤原のとしゆき朝臣

秋ぞきの花さゝきをゝ高砂乃をの上ゝのゝゝやゝくゝ

○余材小古枝の萩乃秋を忘れすてゝこゝふ花さけるともよめる我を昔の心を忘れもせ云ふ雅也こゝ人の昔をわすれぬを嬉しくなつかしうおもふ也こゝを以て萩乃秋を忘れすてゝこゝふ花さけるともよめる我を昔の心を忘れもせ云ふ雅也こゝ人の昔をわすれぬを嬉しくなつかしうおもふ也

やこ我をなれんを云ふ自然歌人をいつ方ふ歌

すの有ささるさまあやまてるもよめる也

○打向ふ男ともなるふ昔志てふ事をおもふ

アてゐるものゝ云ふなるてゝこゝ書ゐんと云ふは非也古季ふ歌の奇ふなと思へるわれをも男ともこゝ云ふ非也古季ふ歌の奇ふなと思へるわおてゝこゝおゝ一きれ萩乃歌ふ入をるのを

○遠境ふ萩ノ去年ノ古枝ヘアレアノトホリ又花イサイタヲ見レハ草木テモマヘカタノ事ヲハ忘レハシマセヌワイスリヤソコモトモ中絶ハ致シタケレト先年御コンイニ致シタ事ハオワスレハナサルマイとハ〳〵ふ非也まつ男ともとゝこゝすかの心忘れさりけるを只萩乃上に依ふてをんや又わをれさりけり依ワスレハナサルマイと今の心をもんやさるわをれさるまゝ一れとなりて

けうれうそ

題しらす

秋くれはやどりある人のいねてすする
未白猶ある人にやよそへてそ
古歌のみにて雁なをもこころそすくなくあ
雁つらめ沼水をそすむなとよめるもおほくあ
ふらふる花のなくさやたちかへりん物おもふやとのあ
我物おもふ宵わるる雁をそ物そよみそのよりて其波なく
んとそふる心詞そうれるめ
ふる

続人しらす

秋のたもとをもとめんとてしかいまぬよしもひとへ枝ゆゑんよ
或人のいそくさにおくれ侍ぬとて
萩の枝の露のうるそもおほかなるみとりなれはなをそてそんよくいふをこくに達すらんとかけぬへしと云ふ
ふけぬと一声これ萩てをそ試ふらんやうふらふ
をもてそんおもそぬへき秋萩のえそもそもおなる志ふ
萩の葉ちるふる小野の秋風にふめもて紙ゆんさはふくも
そそふる此哥をいふ露霜の余材と露と霜
と二法をいへる是い秋の末やうくをくなるにをく霜とを
成ぬへきの露を消るへしといふ心をもて紙ふ

んかぬれくるひとらをのてる秋のかなてる也次さそこて
渡らんをそ我もそんとあやをゝ月見んをんを月をみむ出渡りん渡渡らんなとつゝみを山渡をわん渡渡らんとも云て同しをのをを文字なれをけうしきまれなるとをいふ事也
○折岡小夏小姉うをわらんまをよをうゝしうなをけんを秋の事とをを思ひとれ也云ゝぬれてを行んのをゝ云ゝ
助辞とのさまくゝいふともわや差へりうとゝゝみを也
宇治川を舟渡をなゝふ同しく舟渡をよと云也とゝる第九
也家集の船令渡(ワタセ)等を舟渡をと等へともと云をわるを我と云

る也書まく此宇治川の事わさせのとをゝみへおるゝれゝおゝ
思ふ也ぬれてよわんとてうるうんと云詞にてお世と有也
お事ゝ詩文林の事とゝゝひくとゝれ也けるとを然のをゝいへ古今
れさるとをる笑よへ況やうくをゝちおるき事をやそをく
孔氏の此道ゝ秀うく給ひくおゝ能等
潜ゝ文武の徳を抱き澄者ゝ務れる世を患ひ門地をまゝ俗を
忘ゝ高く風月をうそゝみ其光を晦ゝ清貧を楽ゝ
そて一生涯をゝ終ひゝをを作うさるへゝんや近世和文を
倡へく古学者也と自負をる事ゝ都うく古ゝ唱へく共一班をゝ窺

ひ滑もらく事もうしろ思ひ
もらぬ也

○遠鏡小夜カフケテ露ハシケクトモと云ふ、非也と云ふ説は更ぬ
を露霜ぬきらく事もなるをを小秋さふくと
しのうちを詞を引放ちらく露ハ事を歌の上ニ
をそ分るをいふて露ハおそ事をたらく云ふ詞也
をや又ぬきてをのを片脚なるう共事をたらく云ふ詞也
こと云ふ非也を片を本ら詞の詞へそよりく強くを弱くを
純る也よ解るを乃て知へし

是真れみこの歌の奇合そよる

秋の野ニおくしら露ハ玉ぬけて
玉ぬき貫ぬきたる露ハ
かくる小風ニ吹ちらされ
事也

題しらず

文屋あさやす

なくむしの声を聞ても
此情の草花をみると云名のわむうまさ
我隣居せるなと人ニいひなし
のよそへいこれ末の白ハ只女
ニくいれお物をわれるい志を

備正通昭

逸得さるを云ふく名を為をなるい更也下略よ落
ば俗と落るなるいかやと名のよるは殊更よ云く今を女の男よ
云況(ふ)(る)(ば)落るとい(ふ)(こ)(と)(く)(と)(も)
(ぬ)をいかまて古今まをあ(こ)(と)(ろ)処して落るなる(こ)(れ)(る)(ば)(と)(も)
況や俗の破戒を陸落と云(ふ)(ま)也此落る(れ)
語を後のこ(ゝ)ろ(に)載まてる方よとの(ゝ)(し)(り)(て)(る)(と)(も)
思ひくあ(ら)ぬ辞をう(へ)(ま)る也和泉式部の落をもきりとく(ま)(こ)
う(ら)人まこの奇を後拾遺(ま)(ま)(ま)

の文ともつゝふなもて其筋とりゝさる公の地況やさうく
しう侍りのいるまのうく物よまりやもとりゝ及びく折ー
わとよ馬より落て伏なうゝ処ともゝ云ふ頭もむりよ拙
くてこゝとりゝさるをやいう備正の口氣なりんん
しるへー

○打開よりゝ花とみくく杉人とすまゝ女郎花うく有さよ
の名ふこうあわをまとりゝる如く実ー女のこゝしゝ久く
ちく是を其女とうへてまゝ折ゝ服も名ある花外へて打くる
そりやう云ことのへるい処也うくいつるを考るよ女とゝみ名ゟ
かてこゝ折といへて郎法花ゝ心となるゝまいはくくるを

ゟ半うゝ陸落ゟをとといへる心うゝもとゝ思へるより名ある花と
いへる也女郎花をさして名よめてとのへ女とゝみ名をうるよ
論なりゝる紙名ある花をうつるとゝんや菅方ふ名よめてく
をさうゝ折ゝるをうゝへーとある也女郎花名をうつる也又女花如
ーとうへてといゝうゝ是ゝ其女と思うく多折ゝ時服もとゝいへる
何の事ともゝこゝとりゝも学ゝ寸又名ゟ外つるとゝゝいへる名ある
芸よりゝるとゝ云語ゝいうるへきなりゝすとうゝく知角ーそゝよゝ
ゝるゝこゝわゝとゝ形をゝいゝをゝ外へーを折まる
○遠鏡よりゝまきるとゝ馬よりゝ落ゝるをゝいゝをゝ外へーを折まる
ふゝあゝゝ打学ゝるゝーとゝ云ふゝ服也ゝ馬よりゝ落ゝるをゝ

ふ方よりみなせやまとやまとんく落馬の説
いとくはるるやいなまうでて馬落馬よりいひも
そもそも其事此類書なくて奇のよしてまされとはなきれ也
事也又名もてく折るとみるとい云へ名よてくおわるとくん
いと迂遠よりて語をなしうるをもて之志る〳〵又打岡の落馬
説をとくさるをもて引ていへるもしかく
備忘通昭うをとるなくへやうをもてふまくをもて
ふるかいまみち
女部花うとくとくそうゆきくとるをとこふまたてやとも思へい
奈良へ通昭うをとふまくのやうをもてふまくをもて斯うけ

ふう文のうてくこれ也當時通昭なくまてへ雑部とか
らへうるれるはまなくともくとくとも奇妙なる男とのみ山乃中とて交ひ
てうるをもうしとくとくすくるとも俗ようまくおもふを
云まく遠鏡ホイタツラナ女子ヤとこのをかよくうれへ
○余我小石上寺を夏部とし奈良の石上寺とへいされ彼寺う
住まてる時なるへ〳〵あるを同一寺也打岡うも備忘奈良乃
石上寺と住まへ〳〵此の事也とこふ共小非也奈良とへいとへ同
寺ふうへ〳〵氏石上とあるへ既とくなる事其
所とて来をも又云猶ほ〳〵我妻とをんを男のまへうひなと
とくすくるを云也といへるを非也さへいへ思へうひへるの

○余村と旅ゐはあるに花と女郎花の名をもつまゝ杖の野と
一夜のやとをかすへしと云并岡を是へる共に非也とは
名もむつまじく旅の
紀女郎花とのへしと云也むつまじきは非にやとるゝ非
す又名をもつまゝ杖の野と四句よりて男女
おくんや境や名をもつまゝ猿のおくとかけるにうり
放つつきの句調なんやよく思へし

題しらず

小野のよしも

なくさのへおなじ野といひやすくあるに名をやさら克
こは女多くあるにかやとる〳〵お事有つる中うたゝ往〳〵よん

ひとしき人也其は氣深く味ふへし
〳〵なく〳〵花と戯也名のあるに
頂んよりと帰るさるふまうし落葉をきも也
云よのかまくらをまてを行んとてをまくらんなとのをふ
含く風と〳〵と女こは又一さは耳遠くして名歌の者をきく克へ
なとも類ひまくいふくらをるかの也語うたうの手語と
知克〳〵

○遠鏡小女郎花ノオホクアル野ニトマツタナラワケノナイコニアタナ
名カタ〳〵ウカシラヌ女郎ト云ハ名ハカリテコソアレホンノ女テモナイニトヘ
〳〵ハ非也こゝをきる白花草花をいくすゝ女として其趣をな

○遠鏡小心ひとつとらいふ非也さ
仏さうの事也遠く見ゆる事を其名也とふみつゝ仏さ
とゝ只なく心ふと何そ用ひうん疎安と云ゝ

藤原定方朝臣

妹なくてあみとゝうゝぬをみる
寺の心明くを一物故の名い春秋の秋人をうめの故ふれわく委
く解す

きのふこそ

きの秋ふあくぬをのゆる女郎花なそいろよ出くぬうつ海ふ
女の一生をい寄を失ふ忽裏色のあくふ淡らへて云ゝ

○余村の見る人の仏ま秋ふは非也さ
ふ非也こ仏遠鏡ふ誰カ飽タトイフ秋テモナイニと云ふ
なへゆる人の秋ふその秋るとふうめゆる非ず又なとんぶく
色よ出くぬ女郎花の方よりうつろひそもる秋と云ふも
非也こ仏只うつろふ色のみある也

○遠鏡小女郎花ハトウシタノソアノヤウニ色ニテ、恨ンテマタ早
イニウツロウノハとの心へるハ非也こ仏秋ふそもなおう秋を
立あへうつろふ色よ出ふと云ふて恨むる色よ非ずさ
る事ふなよふ見えて又恨ふうめゆるをれる
あくぬをや女郎花いとく咲て秋の半もまるもちろれ

なれいまでの云ふ也

凡河内

妻こふる鹿う鳴くをきゝて

をしか鳴ふもくさ葉の秋風はめもはんと○と番こゑ

人のみるこゝやくさ〳〵秋雲のきそちつくさ〳〵

むさゝのこなつむるよう女郎花ちうすむ宿ようそんう

猶なうめ〳〵のみあるむよりいさ紅葉ようつし哉て相んま

しとつゝ野をゑ色とそるをにまかよ女のつくく物思ひを

るさまてんをゑ也遠境まひとうとい一をゝそあるよう

凡河内

きてみれ

○遠鏡ホウツシテ植テ見ハヤシテヤラウモノヲと云ふ哥也此又ま

ーいよのかるむるうふとつゝみを受てきてあんよう共ますゝ

て相んまーと云すくんとやーてやんなくらめ〳〵きる哥也

すむとのいんるとつゝ皆男女相ちるむの結也又ものをとのう

まよいつもゑ〳〵といさおんと推さるめて云ふ也これ

ぬまてをゑんんてをちるくんのをれ言をとちめふれくる

月おくす女う男ゑそハをてもをあろうまのふる也と云

中我をむ高き月只我家ま月をゑ共ますんう云

おのつゝくふくめやをんはーをハ只ふまーとつみるをの云

也

のこと記うやく伝ふとらくすくそれを取ふことのできぬなを
おもなるの如き同じ一その事をとゝ心を遣と称ひとつ〳〵
す日本後紀に散うしぬ〳〵其香を古くいはいふもの
伝なとゝいへる皆ふと云ともいふる利也

女郎花うし物やるくもゆる野ともてれい
云ふるを思うしろめたうくいふて云ふて後是兎
を痛めるえ人のなもる利なるへ俗ようしろくくと云
ふ心のいくすうしろめたうくなくもつゝいなくて事元不安心

なるえ也遠鏡ニキツカイナと解なるよく叶へや

○打聞ようし物やるくく我後ろの見えをとえ物なるも
くもつゝおるよく云ふとの人ろ是非也うし物やるきふ
うしろをふるきをる片俗云也況やうしろめたきふ人ろ上
のこいひこと已のようにふことを処す我うし物の見えをもてこ
えぬと云て叶ふ二をもやうしろやと死なと已ふ上をうも
辞とふ自他の差ひろうくく強勢異也

寛平御時后宮の歌合の時ふ小菊ふてそうけるを
そうけるを時ふ人ふてみをうとをけるのそよろ

平ちふん

ゑよりて何ふるうんをも祈へし祈なまし吉凶を
さ斗ま飽をてな祭さは神ろん女郎花多き野へなるふ
所にてを祈ぬへきことをなるを詰うへ行をいかゝせて独
をろ〳〵ますまゝ方まよふこなをも風つゝな
らぬ心をなんをて詞書ゝをめ
○余村小頌書ゝもりて又ふる仕ある身なれいふ性をぬ
欲さまをれや萩ま萱村うふ奇いあやなくあふ名をやふ
人と遠慮ふるを真文ゝきて好色の人なるい却て女郎
云多ふ歌ゝ孫なまゝ一ものをと云やゝる詰非也然
ゝふまはの云更ま有ゝなゝ又真文ゝきいめて好色な

らんまは萱村の遠慮あるふ如さるやうれ事一首乃ふ付て評
をへきなゝんや況やゝは実情なゝ女郎花の上なゝんをや
ゝるは詩の二南大小雅なゝ乃ふの道ゝふ紙数ふるやうれ云
あるより中ゝゝ乃言のゝものゝ出めゝ詰ゝれ欲ふる和以を知
さふの惑ひ也

○遠鏡まハライツハイ工見スニナセニ此ヤウニカヘルフヤラ女郎花ノ
多クアル野テヨヒハ子ヤウテアツタモノヲとのゝふ非也云飽く
なふゆふんい花まあまたゝふゝ乃ふ女郎花さゝ多ふる野
をてやゝすて何ふ云ふ月神ふ学ゝ云すみやけ
ま語勢を守知へゝふるゝ已ふをくい性ゝもやうれ語調ふ

なる人うそぬきてうをふるまひ
此等云ふうを遠鏡解盡をもとうふべし

ゆふされ鶏

やうをし人のうみ方をつくる
あもうを角をようそて人をつくる

ほととぎす

詞書ふうを持をようそて其等と共に人をほととぎすをとうふをう
くい書ふ也又女のをとうにほととぎすと書へおを女郎花の歌
に入をれい人をと書ふをとうにほととぎすと書へ也
ける人の来うをとあうをとをはやをる男ほととぎすと書へ
きを猫の歌に入をれい人の来うとうきに人の許よりわ
なるふ蚤の鳴なるをとうをも郭なる女の許と書へ也
うふ四季に入をる共用捨也さくをとよや女い来てをやくん
事常なるふ詞よりはあるをとをれさる也をし男うちなるむふ
其中をれやし友をいとてうを西へ今んや又ふうを雑に要ふ
句ひにくなと云へをんや必ふへし

○余枝ふ五文字ハ我人の方ゟ来てやも
同由ゟをゟ云ふハ非也やゟも
人の方ゟ行くゟも人の我方ゟ来てやも
を奇ゟゆゟまるゟやゟ云ふを非也これも男ゟ見くるゟう
の石害也

○六冊ゟ奇まくやゟうを一人の事ハまゟゟまゟ端ゟ片言の
如くうをゟの此集の例也ゟ云ふハ非也男ゟ見るゟハつまる
らすゟう六ゟやゟうをゟの一句ゟまうをて其やゟやゟ放
ゟをいうゟゟをゟ書ゟうゟゆゟまゟ事ハ更ゟ云ふまゟなゟ
へゟ限ゟハおくまて着をれゟ文書へき限ゟハ飽まて書る

の此集ゟ例也ゟ云ふゟうゟん事ハ書へきの限ゟ
をや
ゆゟらそう冊をよめる
ゆゟまくゟゟうゟ見ゟ妹の形ゟる事ゟうゟん
そのつゟ薫物の制ハ其加減なゟ殊更ゟ心を盡ゟる事ゟて其巧
拙ゟ陸ゟて匂ゟうくをいやしくも心のやゟさへゟまんゟハ折
薫ゟよゟも眩ゟさハ大やゟう強匂ゟうんゟまゟまゟうなやゟ也て
ハ夫ゟまたゟ匂ひのゟ定やゟうをみ自ゟりぬ事ゟゟ
着ゟうゟの心ゟ味ゟへ又必ゟ
うゟうゟうゟゟ事ゟて

おもそ薄ありてうら枯物なまもて秋更てうく穂ま出るけいろ
らまで庭ものを前栽ま植くまでいはるるおよ秋
とのみ或秋夕なと一叶ちつをれ感ま堪をしてよめる
歌一

○遠鏡ヨスヽキハトコニモタクサンニアル物チヤカソレヤトウモセウコ
トカナイチヤカ今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセ
ウソと云ふハ邪也うくて代萬は家初よりいと嫌ふへきものと
定めり是の因より厭みへき物を今までいかなるゆゑ植てし
まるや更ることもなくぬ事也こはよきうと云るうを
いへ又うるはなりとみ云ふを邪也なりけ直ま

おもそ薄ありてうら枯物なまもて秋更てうく穂ま出るけいろ
らまで庭ものを前栽ま植くまでいはるるおよ秋
とのみ或秋夕なと一叶ちつをれ感ま堪をしてよめる
歌一

○遠鏡ヨスヽキハトコニモタクサンニアル物チヤカソレヤトウモセウコ
トカナイチヤカ今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセ
ウソと云ふハ邪也うくて代萬は家初よりいと嫌ふへきものと
定めり是の因より厭みへき物を今までいかなるゆゑ植てし
まるや更ることもなくぬ事也こはよきうと云るうを
いへ又うるはなりとみ云ふを邪也なりけ直ま

おもそ薄ありてうら枯物なまもて秋更てうく穂ま出るけいろ
らまで庭ものを前栽ま植くまでいはるるおよ秋
とのみ或秋夕なと一叶ちつをれ感ま堪をしてよめる
歌一

○遠鏡ヨスヽキハトコニモタクサンニアル物チヤカソレヤトウモセウコ
トカナイチヤカ今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセ
ウソと云ふハ邪也うくて代萬は家初よりいと嫌ふへきものと
定めり是の因より厭みへき物を今までいかなるゆゑ植てし
まるや更ることもなくぬ事也こはよきうと云るうを
いへ又うるはなりとみ云ふを邪也なりけ直ま

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

つらゆき

秋の野に笹分けし朝の袖よりも

遠鏡こそ露けかりけれ

素性法師

今こんとたのめしものを久方の

夕月夜さへ鳴き出でつるかな

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに

やくや藻塩の身もこがれつつ

大和歌

君こずは寝なましものを小夜ふけて

かたぶくまでの月を見てしが

題しらず

よみ人しらず

秋風に山の木の葉の散るときぞ

山の嵐のふもととは知る

秋風に吹きとく野べの松虫の

声うちそふる夕暮の空

秋風に乱れて雁の鳴く夜は

物思ふ袖も露ぞこぼるる

秋風に初雁がねを聞くなべに

物思ふ人の数まさるらん

秋風に声を帆にあげて行く舟は

天の戸わたる雁にぞありける

秋風に初雁がねを聞きしより

幾重越えぬる白雲の空

秋風に雲の通ひ路吹き閉ぢよ

乙女の姿しばしとどめむ

天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ

乙女の姿しばしとどめむ

秋風に棚引く雲の絶え間より

もれ出づる月の影のさやけさ

秋風に吹上の浜の浜菊は

折りてかざせる人もこそあれ

乃さ面家のさなゝんや彼うい気くおそさゝんの錬悟今ゝ
小只句ゝぬゝちそすゝる彩注さ大和なそゝこ共皆紅梅色よ
て花のをそちゝきく変さうり秋の野ゝゝをちくゝるゝ
とあやさ今の面なそゝゝこのゝ

○遠鏡小見事ニ咲テアルアノ撫子ト云児ヲ云ゝオレハツカリカアヽヨイ
児ヤト云テ獨リ見ハヤサウコカヤと云ふハ非也蕃なくゝ隔の大
和なそゝこと打吟をるようさ無情京卿ゝもこうと思ゝ
況やをるあれをゝゝその撫子と云児をなとけゝ況
をようゝ解へさそのゝおもとち持るまんそうもこともも
当なれとさるいはる方共なこなゝをこうあんれ況や大和

なそゝこさゝるをもちて人の児とんゝんや俗ゐ
とのゝ
題しらず

みさをゐるこれら草やうゝ共ゝ枝をそこのそれまそをけふ
をゝ当ゐ芸のこれをよくゝ秋の野をゝもんひさるとうめ梅
月草ゐ衣ハそゝんあさこゐ
打向ふはさ草ゐ花まて衣ハをゝくゐ衣ゝ
ろれぬもものふ也ゐまても此宮ハ当家の七代巻ゝ警衛奇ゝ
申ゐ出ゝ四代句ぬまて後ゝハとあるのを変さうそれハ兎ゐ奇
まて一度ゝを逢さは後ハうの約ふ逢ハうをなりとをとのふ心也

と云ふも是れ古くよりの例の奇なるべし月草を付て筆ぜの歌よ入らまてもとも（ともの誤）（それと序文と万葉集よ（の誤）ふる所つゝれをもまゝ（ま誤）ゝ（ゝ誤）ゝ（ゝ誤）ゝ（ゝ

家屋一般の事をいふも共家を主に附ら又雑部を参照
ありたける附なども母の家なんどいまもくとゝゝ
てう門ありても主ぢんてう一方の公的ゝきを一方のきゝ間塀の
ごまて庭ゝゝ主人小屋也法のおやうの大なる對にて云め
ゝ門と云て中間の小門を間門と云これと一是も等葉と前
垣とあるを以て前なる垣とのゝ思へうちい屋門を屋前と
書る類ひなれ共をやまて書るゝく正字ゝ非す